

教材理解・児童理解にもとづく究極の授業 一徹国語人

東京からJR東海道線で西へ一時間

ほど行ったところに平塚市がある。相模川の西に位置し、湘南地方屈指の発展都市でありながら、四八〇〇mにおよぶ海岸線から西北に末広がりに緑地があやなし、平野・砂丘・丘陵・台地・山麓など、自然環境にめぐまれた地域である。また、昔から東海道五十三次の宿場として栄えた土地として、多くの人たちに知られたところでもある。

今回お邪魔したのは、二十八校ある平塚市立小学校の一枚で、校庭内に森林公園や水生生物池などをもち、学校全体で国語の授業研究に取り組んでいる、松が丘小学校という学校である。授業を見せてくれたのは、その推進

役をしている六年二組の担任、五十嵐透先生。授業は「人物の生き方を考えよう」という単元で、立松和平氏の『海の命』という教材を使った読解学習であった。

五十嵐先生は日ごろから「環境」ということにこだわり、人間環境・社会環境・自然環境に関連する内容を、いろいろな学習の場で児童に語りかけ、考えさせてきたとのことである。

そこで今回は、六年生の学習目標である「ハビネス―自分の幸せ、みんなの幸せを願って行動しよう」という視点を意識させつつ、本当の豊かさとはいったい何なのかを考えるきっかけに、この教材を読み解く学習を展開させた

ということであった。

授業を参観してまず驚いたことは、五十嵐先生が教科書をまったく見なかったということだ。

本時の目標は、「話す・聞く」「書く」を技能目標として話し合い活動をすることであった。具体的には、

・『海の命』から学んだことを相手に伝えるように工夫して話すことができる。

・友達の考えを聞いて、ノートにまとめることができる。

の二つである。

つまり、個々の児童の発表を柱とした学習展開なので、教科書は使用しなくてもできるのかと、教室に入ったと

きは考えた。ところが、実際はそういうことではなかった。

五十嵐先生は、立松和平氏の原作はもちろん、いくつかの教科書会社の同一作品の読み比べもあり、そのうえこの教材の（キーワードのページや行数も含む）全文を暗記していたのだ。もつとびつくりしたのは、児童全員（三十九名）の一読後の感想文を一人ひとりの感想内容を類別した上で、印刷して児童に配布していたのだが、それも誰が何に心を動かされ、どんな考えをもっているのかまでそっくりそらんじていたことだ。

感想文を書かせたのは二十分間だったという。平均字数は二六〇字で、六文構成が大半であったが、長いものは約六〇〇字が二人、三〇〇字程度が十三人。何も書けない子は三人だった。

五十嵐先生はこの単元を十一時間扱いとして、そのうち最後の二時間は「立松和平さんの世界にふれる」というテーマで発展読書をさせる計画とした。

つまり、読み解く学習は実質九時間である。

私が参観したのは最終に近い八時間目だが、前の時間に「主題に対する自分の考えをまとめる」という学習があり、その文章をもとに発表会が行われていた。

そこですます驚かされたのは、五十嵐先生はこのときの児童の感想文の内容も、全員分暗記していたことである。

児童に司会をさせる話し合い学習が多い昨今である。発言者が次の発言者を指名する方式で、一見活発そうな自由発表学習もよく見かける。しかし、今回見せていただいた発表・話し合い学習では、先生が徹頭徹尾、児童の感じたこと、考えたことを知り尽くし、この教材の内容と価値を十分に分析したうえで、児童一人ひとりの個性や思いを生かしつつ、より深く、より広く、より高い読みへと全員を誘っていく『師の高度な技』を見せてもらえたので



校内にある「自然学習園」

一徹国語人にご意見・ご質問がある方は、広報部までお便りをお寄せください。
一徹国語人がお返事をいたします。お便りは、誌上にて紹介させていただきます。お便りありますので、あらかじめご了承ください。
FAX: 03-3493-5483
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp